信毎歌壇

小池　光選

ヘリコプターみたいな女児の笑ひ声老二人暮らしに咲く蓮の花　（長野市）伊藤　恵子

水の出が悪くて如露の中見れば蟹が出口を塞ぎてをりぬ　（飯綱町）坂井　寿男

産土の木曽を離れて七十年ふるさと訛り失せて寂しも　（千曲市）上原　博司

息を止めブナの木に耳を押し当てて聴かばや木が水吸ひ上ぐる音を　（千曲市）中村　美樹

アメリカ産マツタケを買い飯を炊き独りのわれはあきをあじわう　（長野市）せきたつお

若き日の思い出いずこ須臾の間に九十五歳となりし心地す　（小諸市）篠原　昭枝

露草の気品に満ちた青き花草刈る我は暫しためらう　（佐久市）小泉　英介

風に飛ぶ白き糸屑よく見れば蟷螂の子台風近し　（長野市）宮崎　雄

偉丈夫の弟帰省し手料理の食べっぷりのよさ母喜ばす　（小諸市）池田　真弓

素気ない返信が来て自分からはもうメールしないと心に決める　（松本市）堀内　悠子

佳作

朝一番家中の窓明け放し胸一杯に秋を吸い込む　（長野市）小林　操

聞こえくる発車のメロディ「信濃の国」つい口ずさむ故郷の駅　（千葉県船橋市）清水　渡

選評

第一首、なんといってもヘリコプターみたいなこどもの笑い声、という比喩がおもしろい。お孫さんだろう。老い二人の生活にぱっと蓮の花が開いた。第二首、こちらは事実そのままの写生の歌。ジョウロの水の出がわるいと見てみれば蟹が一匹、出口を塞いでいたのだった。めずらしい出来事。第三首、ふるさと木曽の言葉はどんなものなのだろう。言葉を失うことはふるさとを失うことである。

小島　なお選

夕立は馬の背を分けると云いし母私の背にも慈雨をください　（長野市）黒柳　響子

ジャンダルムに命をかけて登る友そこにあるのは黒い岩だけ　（松川村）岡　豊村

お蚕の桑食む音が夕立のごとく注いだあの日あのとき　（小諸市）星野　直人

昼寝覚めテレビに映る風の盆夢の世界の続きのように　（佐久市）小泉　英介

片陰を拾いて往きし散歩道太き電柱ありがたきかな　（長野市）松本　博人

僕にはもう愛の言葉は聞こえないあまりに高き周波数ゆゑ　（塩尻市）藤森　円

夏の夜の網戸に蟷螂両の鎌たたみ静かに獲物狙へり　（安曇野市）東野　行岳

ワイン用の葡萄の房切り頼まれてにわか雨降る葉陰に汗ばむ　（松本市）田中しはす

皮ごとが良いと注文受ける度味は巨峰とつい口に出る　（松本市）溝上ひろみ

詠む心萎えゆく木曜我が前に剪りても剪りても伸びる桑垣　（伊那市）堀米　好美

佳作

かろやかにトンボは宙を滑りゆく重き足引きわれはリハビリ　（長野市）千花　麗泉

キンモクセイ誘ふ香りの辻の先薄い記憶の夕暮れの道　（安曇野市）中村　玲子

選評

第一首、酷暑の夏。母が口にしていた慣用句に、馬の背を打つ豊かな雨を想像する。馬から私の背へ、大胆な身体感覚がつながる。第二首、北アルプス奥穂高岳の岩稜ジャンダルムに挑む友。その情熱の不思議をあけすけな結句が端的に表す。第三首、ふいに訪れた沈黙を取り囲む音音音。記憶を現在形でうたう臨場感。第四首、富山市の風の盆祭り。秋のはじまりはどこか幻想的な世界を連れてくる。

米川 千嘉子 選

在りし日はライバルと思い死してなおライバルなりけり本屋の主（あるじ）　（千曲市）関　津和子

「疲れた」と「痛い」しか言わぬわが親子まづいと気づき娘が笑ふ　（山形村）上條ひろ子

伯母が飲み伯母を治せずさまざまな色の薬がマンションに残る　（長野市）伊藤　恵子

こんなにもごつごつじゃなくてもいいじゃないゴーヤに言いて炒めておりぬ　（松本市）田中しはす

放課後の校庭に立つPTAトランシーバー各々持ちて　（長野市）平沢　均美

優勝だ信濃に多いトラファンは地元のバーで下戸も美酒酌む　（長野市）青木　武明

「来ましたよどちらまでです？」バス停に白杖のわれへ嬉しい言葉　（千曲市）上原　博司

五十年前のクラスの寄せ書き帳担任でありし夫にとどきぬ　（飯山市）市村紀久子

立派だが仲間はずれにされないか友を諫める孫を案じる　（佐久市）小泉　英介

今住める平らは雨が幾万年かけて作りしものと知りても　（長野市）原田　浩生

佳作

交替で妻と草刈る山の畑遠く住む子ら頼みにならず　（飯綱町）坂井　寿男

久々に姉妹三人集りて末っ子の八十歳（はちじゅう）を皆で喜ぶ　（飯田市）小島　夙子

選評

第一首、「本屋の主」といえば「信毎歌壇」の長年の投稿者や読者はぴんとくるだろう。「歌壇」がこうした強い心のつながりや意欲の場であることに感慨を覚える。第二首、気の置けない母娘だからこそ無口になるのだろう。温かい歌だ。第三首、残された薬の歌は少なくないが「伯母を治せず」というのは当然のようながら、はっとした。第四首、同感。私は最初にゴーヤーを洗う時に思います。

信　毎　俳　壇

今井　聖 選

中元の礼状に知る認知症　（長野市）原田　浩生

DJに安否問はれし秋の暮　（松本市）伊藤　和夫

ひらがなのはがきに泳ぐ金魚かな　（塩尻市）長　三枝子

而して妻の根気の栗御飯　（箕輪町）向山　政俊

リハビリ後まどろむ妻や秋扇　（松本市）小林　幸平

干上りし池に蜻蛉の旋回す　（岡谷市）吉池富貴勇

兜煮の目玉秋思のはじめかな　（長野市）荻原　宏祐

井戸水の温かくなり白露かな　（長野市）山田登志夫

秋枇杷の樹勢まぶしき老いの朝　（長野市）宮沢　義親

自転車をかはす飛蝗の跳びつぷり　（佐久市）佐藤　勝子

佳作

落ちりんご召しませ象よ飽きるほど　（長野市）武田　芳子

蝗取母手作りの布袋　（宮田村）佐野　栄一

選評

一句目、お中元を出したら礼状が来た。それは良いのだけど、その礼状は認知症が案じられるような内容であった。類を見ない実にリアルな一句である。二句目、ラジオのDJが自分に向って安否を問うている。この句も類を見ない。三句目、ひらがなばかりのはがきに金魚の絵が添えてある。絵の素朴さもまたうかがえる。四句目、栗飯を作るときの手間を作者は知っていて妻に感謝している。

神野　紗希 選

窯跡の草の驕りや雁渡し　（安曇野市）小坂るり子
貸自転車出払っている秋桜　（長野市）荻原　宏祐
三面鏡髪乾かして秋思置く　（長野市）斎藤　俊幸
グラタンのフォークに垂るる本しめぢ　（長野市）原田　浩生
薄墨の幸あるごとく虫集く　（長野市）武田　芳子
湖の廃船溜り水澄めり　（箕輪町）向山　政俊
ブロンズの眼に羞恥桐一葉　（松本市）伊藤　和夫
診察はＡＩで呼ぶ今朝の秋　（佐久市）松下　公子
漬物に砂糖も少し秋なすび　（伊那市）中村　茂子
崩落の地肌現わに山粧ふ　（中野市）芋川　菊水

佳作

駅頭に君待つ空の稲光　（佐久市）小林　真人
小鮒炊く厨を巡る秋の風　（佐久市）箕輪なつ江

選評

秋もさまざま。一句目、人が手放した窯跡には草が自由に生え、高く澄む空には雁渡しの風が。時は過ぎゆく無常の秋。二句目は爽やかな秋。サイクルポートに焦点を定めたことで、想像が広がる。自転車でコスモスの野へこぎ出せば、きっと心地よい風が吹く。三句目は愁いの秋。三面鏡のどの鏡にも、私の愁いがあきらかに。四句目は食欲の秋。フォークに掛かるしめじ、ありありとおいしそう。

坊城　俊樹 選

蔓引けば南瓜は馬車となりにけり　（長野市）白鳥　寛山
憂ひ事どこか花野に置き忘れ　（箕輪町）向山　政俊
灯火親し版木に刻む明と暗　（上田市）竹内　重美
虫の音の夜ごと膨るや地酒酌む　（佐久市）木内利一郎
我こそは天下国家のかたつむり　（松川村）松田　雄介
古里の筋金入りの秋の天　（佐久市）市川小夜子
向う岸知らぬとんぼや高瀬川　（松本市）滝沢征矢子
尾を引いて滅ぶ星また秋深し　（佐久市）吉岡　徹
青空に噛み付いてゐる雲の峰　（佐久市）町田ゆかり
縄文人良夜の中で狩りのこと　（上田市）竹内　創造

佳作

仕舞屋のショーウィンドウに秋日かな　（松本市）伊藤　和夫
句碑一基草に埋れて素十の忌　（中野市）芋川　菊水

選評

一句目、これは映画「シンデレラ」の光景に例えた句か。彼女が舞踏会へ行く時の馬車だろう。実際には蔓を引いて収穫するとこんなすてきな南瓜（かぼちゃ）となった。作者の感性に感服。二句目、花野とは花が咲き乱れる野原。その世界に入れば憂い事などすぐに忘れてしまう。三句目、秋の夜の灯火で版画を彫る。明と暗を刻むのが肝要だ。夜長のこの灯は版木を作るのに素晴らしい空間を与えてくれる。